日本英文学会 北海道支部

第 70 回大会プログラム

日時：令和 7 年 10 月 13 日（月祝）

会場：北海道大学 学術交流会館（札幌市北区北８条西５丁目）

〈会場アクセス・地図〉

・JR「札幌駅」から徒歩 7 分

・市営交通・地下鉄南北線「さっぽろ駅」から徒歩 8 分、「北 12 条駅」から徒歩 7 分

※当施設には駐車場がございません。最寄りの公共交通機関のご利用をお願い致します。

〈懇親会のご案内〉

場所：カフェ de ごはん（札幌市北区北８条西５丁目、学術交流会館東側、TEL 011-717-2944）

日時：10 月 13 日（月祝）18:15-20:15

会費：一般会費 5500 円、学生会費 4500 円

出欠確認：懇親会参加希望の方は 9 月 30 日（火）までに下記フォームにてお申し込み下さい。

<https://forms.gle/ZuSB69JAUdvLHSMw5>

〈昼食について〉

昼食につきましては、「カフェ de ごはん」や上記地図にお示ししたコンビニエンスストアなどをご利用下さい。

〈発表者・参加者控室〉

とくに設けておりませんので、発表をなさる会議室やホールなどをご利用下さい。

《大会プログラム》

受付開始 (9:40~) （学術交流会館 第３会議室前の廊下。書籍展示もあり）

開会式 (10:05~) （学術交流会館 第３会議室）

開会の辞　日本英文学会北海道支部 支部長　　野 村　益 寛

理事会 (11:45~) （学術交流会館 第２会議室）

＜文学部門＞（学術交流会館 第３会議室）

研究発表１ (10:20-10:55)

司会　北海道教育大学旭川校　十 枝 内　康 隆

La Sainte Courtisane との比較により明らかになる *A Florentine Tragedy* における女性悪を表す商品としての女

北海道教育大学札幌校　　本 間　里 美

研究発表２ (10:55-11:30)

司会　藤女子大学　　大 桃　陶 子

十九世紀後半のヨーロッパにおける政治的ラディカリズムとその挫折—自然主義文学としての *The Princess Casamassima*

北海道教育大学釧路校　　砂 川　典 子

＜語学部門＞（学術交流会館 第４会議室）

セミナー (10:20-11:20)

司会　藤女子大学　　對 馬　康 博

生成 AI と認知言語学との対話—生成 AI が照らす言語の姿—

日本大学　　町 田　章

休憩 (11:30-13:00)

＜文学部門＞（学術交流会館 第３会議室）

シンポジアム (13:00-15:30)

翻訳で文学研究を揺さぶる

司会・講師　北海学園大学　森 川　慎 也
講師　順天堂大学　山 本　史 郎

＜語学部門＞（学術交流会館 第４会議室）

シンポジアム (13:00-15:30)

A/A'-distinction をめぐる問題—最近の極小主義の観点から—

司会・講師　北見工業大学　戸 澤　隆 広
講師　旭川医科大学　三 好　暢 博
講師　旭川医科大学　柳 澤　國 雄

＜共通プログラム＞（学術交流会館 第３会議室）

特別講演１ (15:45-16:35)

司会　北海道医療大学　鎌 田　禎 子

新渡戸博士と英文学

北海道大学名誉教授　長 尾　輝 彦

特別講演２ (16:40-17:30)

司会　旭川工業高等専門学校　水 野　優 子

北海道支部学会の 70 年（前半）とプロポーズには Will you marry me?と言い Can you marry me?と言わない本当の理由（後半）

北海道大学名誉教授　高 橋　英 光

総会・閉会式 (17:35-)（学術交流会館 第３会議室）

閉会の辞　日本英文学会北海道支部 副支部長　三 好　暢 博

懇親会 (18:15-20:15)（カフェ de ごはん）

＜発 表 要 旨＞

＜文学部門：研究発表１＞

La Sainte Courtisane との比較により明らかになる *A Florentine Tragedy* における
女性悪を表す商品としての女

本 間　里 美（北海道教育大学札幌校）

Oscar Wilde の *A Florentine Tragedy*(1893–95 頃)における、「新しい個人主義」へと至る道を妨げる私有財産としての女について、*La Sainte Courtisane or the Woman Covered with Jewels*(1893–95 頃)との比較から論じる。同時期に書かれたともに未完である両作品には、登場人物の男性同性愛を示唆する複数の描写がある。しかしながら、*La Sainte Courtisane* の聖人 Honoriou が男性同性愛の欲望を解放し、Wilde が *The Soul of Man under Socialism*(1891)で述べる「新しい個人主義」へと到達した一方で、*A Florentine Tragedy* の Simone はその欲望を抑圧したまま、妻に魅了されて物語を終える。その相違には、Wilde が *The Soul of Man under Socialism* において人間の発展を妨げるものとして批判した、Simone による私有財産への執着と、商品として描かれる Simone の妻 Bianca が関わっている。商品としての女がいかにして Simone が新しい個人主義者となることを阻んだのか、男性同性愛、閉じられた空間、女性悪を表す私有財産としての女という観点から明らかにする。

＜研究発表２＞

十九世紀後半のヨーロッパにおける政治的ラディカリズムとその挫折
—自然主義文学としての *The Princess Casamassima*

砂 川　典 子（北海道教育大学釧路校）

十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、急進的な政治思想や社会構造の変革を主題とする小説が多数出版された。ジェイムズの *The Princess Casamassima* もその一例で、これまでにディケンズの *A Tale of Two Cities* やコンラッドの *Under Western Eyes* との比較研究が行われてきたが、両作品以上に時代的背景や主題において共通点の多いツルゲーネフの *Virgin Soil*、およびゾラの *Germinal* との比較は少ない。本発表では、*Virgin Soil* と *Germinal* との比較を通じて、ジェイムズの自然主義的要素とその独自性を検討する。自然主義的手法を取り入れつつ、内面的・審美的価値に重きを置く筆致は、同時代の政治的イデオロギーへの根源的懐疑を映し出し、不安や曖昧さを含む描写は、自然主義への内省的批評であり、現代的感性を先取りした文学的試みとして再評価されるべきである。

＜文学部門：シンポジアム＞

翻訳で文学研究を揺さぶる

司会・講師　　森 川　慎 也　（北海学園大学）
講師　　山 本　史 郎　（順天堂大学）

翻訳という行為ははたして文学研究と同じ読解プロセスを辿るのか？　翻訳行為は文学研究とどこが同じでどこか違うのか？　文学研究者なら一度は抱いたことのある素朴な疑問であろう。今回のシンポジアムでは、一文学研究者である森川がこの素朴な問いかけを名翻訳者であり、翻訳論の第一人者でもある山本史郎氏に投げかける。上の素朴な疑問は、作者・テクスト・読者・意味など、翻訳行為と文学研究に共通するはずの概念の再検討をもたらすであろうし、翻訳行為を通して文学研究のあり方をいま一度考え直す契機にもなるであろう。言うまでもなく文学研究者が読むのは原作のテクストであり、文学研究者はその原文を徹底的に精読する。だが、この慣習化された行為の中で見落とされてきたものがあるのではないかという問題提起にまで踏み込み、現状の文学研究に揺さぶりをかけたいというのが、登壇する二人の講師の意図（ねらい）である。

翻訳とは「模倣作者」になること
－V. S. Naipaul, *A House for Mr. Biswas* を訳して－

森 川　慎 也（北海学園大学）

昨年、V. S. Naipaul の *A House for Mr. Biswas* (1961) を全訳した。翻訳して気づいたのは、翻訳という行為が「作者」との対話を抜きにしては成立し得ないということである。訳者は一読者としてテクストと向き合うが、何度も読み返すうちに、テクストを通して「作者」と想像上の対話を重ねていく。テクストに残された「作者」のねらいを一つ一つ確認する。そうやって一篇の文学作品を訳し進めながら、訳者はいわば「作者」に憑依し、「模倣作者」（a mimic author）になる。原文テクストを精読する点では、翻訳行為と文学研究に差異はないと思われるが、翻訳は「作者」との対話を抜きにして語れない。そしてこの「作者」との対話こそ、長いあいだ、文学研究で忘れられてきた営みではないか。そんなことを考えながら、私自身がいかに Naipaul と想像上の対話を重ねて「模倣作者」になったかを報告する。

文学研究でまず行うべきこと

山 本　史 郎（順天堂大学特任教授・東京大学名誉教授）

New Criticism 以来文学研究は「作者」を排除してきた。「作者は死んだ」が文学研究の axiom だが、これは本当に正しいだろうか？ 近年「世界文学」が注目され、文学翻訳が流行している。しかし、翻訳が大前提とするのは「作者」の存在である。何らかの構成意図と表現意図をもった「作者」の存在を意識化し、それらを十分に理解するところに文学の翻訳が立脚するからである。本発表では一見何げない部分に大きな意味が「作者によって」仕組まれていることを、『赤毛のアン』『ホビット』等の作品からの実例によって説明し、このような意味作用こそが文学を文学たらしめるものであることを示す。このように、翻訳という行為を「補助線」とすることで文学の本質が見えてくる。それによって、「作者」を排除することは文学の本質と矛盾し、それを前提とする文学研究は自壊の種子を孕んでいることが明らかになる。また、文学研究・文学教育でまず行うべきことが見えてくるだろう。

＜語学部門：セミナー＞

生成 AI と認知言語学との対話－生成 AI が照らす言語の姿－

町 田　章（日本大学）

近年の生成 AI による大規模言語モデルの進展に触れ、少なからぬ言語学者が戸惑いを覚えている。生成 AI は今後の言語研究のあり方を変える可能性があるのか。ChatGPT などのチャットボットは、人間の言語能力をどの程度反映しているのか。生成 AI は「意味」を学習できているのか。生成 AI は言語直感を持ちうるのか。そして、生成 AI は言語生得性をめぐる議論にどのような影響を及ぼすのか。

これら次々に湧き上がる疑問に対し、「生成 AI は単なる機械であり、人間の言語とは無関係だ」として等閑視する研究者もいれば、チャットボットによる自然な会話のやりとりを目の当たりにして、これを単なる機械として切り捨てることはもはやできないと考える研究者もいる。

本発表では、現在の生成 AI の設計思想と認知言語学との異同を考察し、大規模言語モデルと従来の言語研究との接点を探る。その上で、今後の言語研究の方向性についても検討したい。

＜語学部門：シンポジアム＞

A/A’-distinction をめぐる問題
―最近の極小主義の観点から―

司会・講師　戸 澤　隆 広（北見工業大学）
講師　三 好　暢 博（旭川医科大学）
講師　柳 澤　國 雄（旭川医科大学）

GB 理論以降の統語研究は、A/A’位置の特性の共通理解をもたらした。しかし、当該の統語的位置の厳密な定義付けに成功したことはなく、常に何かしらの問題を孕むものであった。A 位置を潜在的な θ 位置とする見解(Chomsky (1981))は、現在では標準的な仮説となっている動詞句内主語仮説(Kuroda (1988), Sportische (1988), Koopman and Sportische (1991))の下では、もはや維持しがたい見解である。また、Saito (2016)をはじめとする反ラベル付け装置としての日本語等の格素性にかかわる提言を鑑みると、φ 素性の一致から A 位置を捉える試み(Chomsky (1998))も精査する必要があるのが現状である。本シンポジウムの目的は、A/A’位置の区別が分析の成否に関わる言語現象を考察し、当該位置の特性が他の独立した原理や一般化から導出できるかを問うことにある。

A/A’位置再考

三 好　暢 博（旭川医科大学）

Chomsky (1981)において提唱された A 及び A’位置がその実証的意義を確立している点に関して異論は少ないと考えられる。しかしながら、Chomsky (1981)の提案においてさえ、θ 理論の観点からは、A 位置が自然類を形成することはなかった。周知の通り、当該の問題は、Fukui (1986), Kuroda (1988)等の動詞句内主語仮説以降、より深刻な理論的問題を提起している。すなわち、A/A’位置に関する一般的な合意があるにも関わらず、形式的に妥当な定義がないという問題が残されていた。このシンポジウムでは、A と A’の両方の性質を示すとされてきた事象に焦点を当て、Duality of Semantics (Chomsky (2024))が、A/A’位置の区別に関してどのような知見をもたらすのかを考察し、その帰結を探求する。

主語の階層的位置とその A/A’特性について

柳 澤　國 雄（旭川医科大学）

主語の特性を有する要素の占める位置およびその振舞いは、生成文法理論の発展とともに絶えず理論的関心を集めてきた。とりわけ、主語としての A 特性に加えて wh 句としての A’特性をも併せ持つ主語 wh 句においては、A 位置である TP 指定部を経由して A’位置である CP 指定部へと移動する派生が一般に想定されているが、空移動仮説や Chomsky (2013, 2015)のラベル付け理論の議論などを受け、主語 wh 疑問文の分析には多くの代案が提示され実証的検討が重ねられている。近年、Bošković (2024)は従来の A/A’の二分法を再考し、主語 wh 句の移動は CP と TP の中間位置であり混合的な A/A’特性を持つ投射 A/A’P に着地することを論証している。本研究では、主語 wh 句を含む複数種の主語を取り上げ、それらの移動先としての中間的機能投射 A/A’P の概念をラベル付け理論の枠組みにおいて定式化することを試みる。

英語の不定詞関係節について

戸 澤　隆 広（北見工業大学）

A’移動が関わる構文の一つに不定詞関係節がある。不定詞関係節とは形容詞的用法の to 不定詞節のことである。その特徴の一つは関係節が法的解釈を持つことだが、この解釈がどのようにして得られるのかについては未解決となっている。本発表では、目的語を関係節化した不定詞関係節に焦点を当て、その内部構造として、音形のない BE が不定詞関係節を補部にとると提案する。これにより、不定詞関係節が法的解釈を持つことに説明を与える。また、関係節の主要部繰り上げ分析のもと、主要部が関係節内から主要部の位置に移動し、その位置で BE から部分格を受け取ると主張する。これにより、不定詞関係節主要部の定性効果に説明を与える。また、不定詞関係節には自由関係節が認められないこと、さらには不定詞関係節の非制限用法が認められないことにも説明を与える。また、関係節の主要部繰り上げ分析(Schachter (1973))の妥当性についても議論する。

＜共通プログラム：特別講演１＞

新渡戸博士と英文学

長 尾　輝 彦（北海道大学名誉教授）

新渡戸稲造(1862-1933)は、札幌農学校卒業後東京大学の選科生になるが、志願した際、面接官に、農業経済を学ぶほか英文学もしたいと言い、「英文学は何のため」と問われ、「太平洋の橋になりたいから」と答えた。「英文学は副業だった、本業はいろいろ変わったが、この副業は決して変わらなかった」と、最晩年の講演で言っている。1933 年 4 月、アメリカでの講演旅行から帰国した新渡戸が、日米関係悪化を危惧する内外百人を超える聴衆を前に行ったその講演”How Geneva Erred”を、Longfellow の詩行との関連で見てみる。

Ships that pass in the night, and speak each other in passing,
Only a signal shown and a distant voice in the darkness,
So on the ocean of life we pass and speak one another,
Only a look and a voice, then darkness again and silence.

＜特別講演２＞

北海道支部学会の 70 年（前半）とプロポーズには Will you marry me?と言い
Can you marry me?と言わない本当の理由（後半）

高 橋　英 光（北海道大学名誉教授）

前半では、北海道支部学会の 70 年間の活動を振り返る。創設期の 1950 年半ばから現在まで学問を取り巻く社会状況は絶えず変遷し、テクノロジーの急速な発達は学問的手法に大きな影響を及ぼしてきた。その中で当支部学会がどのような変化と進化を繰り返して今日に至ったのかをお話し、今後歩むべき方向を考える機会としたい。

後半では、講演者の現在の研究テーマである英語の行為指示文を論じる。英語のプロポーズでは、Will you marry me?と言い Can you marry me?と言わないことは周知の事実である。久野・高見(2022)は、最近の助動詞研究書の中で Will you 形と Can you 形の依頼文の使い分けを論じているが、このプロポーズ表現が用いられる動機・理由を明解かつ詳細に解説している。この講演では、久野・高見の分析についての疑問点と不十分な点を指摘し、修正案を提案する。